

3

1889年、福島県の農家に生まれた遠藤新は、地元有志の後ろ盾を得て、仙台の第二高等学校から東京帝国大学建築学科に学んだ。利発な青年は、すでに在学中にフランク・ロイド・ライトの作品を知り、衝撃を受けたという。そして、来日中だったライトと運命的な邂逅^{かいこう}を得て、すぐさまライトに伴って渡米、タリアセンで約1年半、師の建築哲学にじっくり触れた。誠実で有能な弟子だった彼をライトは「エンドーサン」と呼び、信頼していたという。帰国して帝国ホテルの完成に尽力し、現場でライトの哲学・有機的建築の神髄をさらに深めた。遠藤は生涯、その精神を守り、日本に根差した独自の建築を模索しながら精力的に設計活動を展開した。生誕120年を過ぎた今もなお、日本ではライトと同一視されるほど、遠藤の作品の中には師の面影が生きている。今号は多くのエピソードを通して、遠藤の素顔を浮き彫りにした。今まで知り得なかった豪放磊落、天衣無縫だった遠藤が見えてくるだろう。

遠藤新

A t a E n d o h



所蔵:井上祐一

卒業設計「CITY HOTEL」詳細図[部分、1914]
[所蔵:東京大学工学部建築学科]

福田村から東京へ

建築家・遠藤新は、フランク・ロイド・ライトの愛弟子として知られる。元伊達藩の武士であった遠藤家は農業を営み、新は父・慶三と母・かしくの次男として明治22年[1889]6月1日に福島県相馬郡福田村に生まれた。利発な少年は、新地の郵便局長の支援を受けて相馬中学校を卒業し、次いで仙台の第二高等学校に入学した。ここで遠藤は教師であった土井晩翠^[1]に出会い、生涯、親交を持つことになる。

東京帝国大学に合格して上野駅に着いた遠藤は、生まれて初めていなり寿司を口に、「世の中にこんなうまいものがあったのか」と驚いたという。当時の農家の生活を物語るエピソードかもしれない。

大正期の遠藤の建築への姿勢と人物像

入学後は、東京帝国大学基督教青年会館に寄宿し、ここで親友となる星島二郎^[2]と出会う。後に星島は、犬養木堂^[3]、山邑太左衛門別邸^[4]などの仕事の紹介者、日比谷三角ビルディング^[5]などの発注者となる。また、帝国大学で教鞭を執る吉野作造^[6]は、自身の書斎の増築や東京帝国大学基督教青年会館、賛育会病院^[7]などで直接あるいは間接的に遠藤とかわることになる。その後、下宿に移った遠藤は、後に妻となる下宿の娘・江原都と出会う。

大正3年[1914]9月に卒業し、翌大正4年[1915]4月に明治神宮造営局に奉職する前の1月に「東京停車場と感想」を伊東忠太の勧めで『読売新聞』に投稿し、掲載された。皇居の門前に建設された駅は、丸の内と銀座の往来を断ち切り、皇室用の出入口を中央に設け、乗車口と降車口を別にするなど、都市計画にあるいは駅としての機能上などの問題点を論じていることは知られている。

この批評に対して、かつて「喜びの笑みを禁じえなかった」という帝国ホテルの現場事務所で遠藤の下にいた伊藤清造は、遠藤が口数少なく、ひたすら仕事に打ち込む“芸術家”、“建築家”であり、“批評家”や“哲学者”ではないとし、“商賈的”な建築家とは根本的に異なると述べている。また、ライトとは異なる天才であり、「正しい事自然な事を唯一の基調とする稀れな天才」で、「謙譲の徳の大なる」、「平等無差別的で部下に対しては慈父の如く親しみのある」人物であると、遠藤を評している^[8]。また、「拙新論争」^[9]で知られる山本拙郎は、「ホテル仮館は吾々に多くを教へて呉れる」として「生氣澆刺たる設計は沈滞しそうな自分の血を血気の中を跳り流れしめる」と述べている。そして、いつか遠藤の自宅を訪れると約束したので、「智慧を分けて貰つてくるつもりである」と締めくくっている^[10]。いずれも、大正9年[1920]のことである。

前後するが、明治神宮に奉職後、明治神宮宝物殿の競技設計に応募した遠藤の案は、3等2席に選ばれた。このことについての遠藤の日記がある。「辰野さんが、遠藤さんのを何故一等にできなかったと伊東さんに申されし由 松井彌太郎殿、いひ越してあり(中略)辰野さんが、うんと賞めたそふなり」、「辰塾(ママ)さんが賞めたそふなり 老人に賞めらるゝ事はよきものか、果してよきものか、嬉み様にして、淋しき湧く」と、複雑な心境を記している^[11]。

遠藤は、大正12年[1923]の関東大震災の後に賛育会産院^[12]ほか、多数のバラック建築^[13]を手がけたことで知られている。設計者が明記されていないものの、東京市質店や公共食堂あるいは公衆浴場など、彼の設計と考えられる震災後の建物があることから、遠藤の社会事業に対する活動を垣間見ることができる。賛育会理事長を務めた藤田逸男は、産院の建設について、「素より設計料など、頼む方でも、頼まれる方でも問題にはしてない」と両者の慈善事業に対す



帝国ホテルの現場事務所にて | 右から林愛作、ライト、遠藤 [所蔵:遠藤現建築創作所]



遠藤新と妻の都 | 結婚した1920年は、遠藤にとって本格的なホテル現場スタートの年でもあった [所蔵:遠藤現建築創作所]

1——土井晩翠[1871-1952]詩人・英文学者。仙台に生まれる。第二高等中学校を経て、東京帝国大学英文科卒業。滝廉太郎作曲「荒城の月」の作詞で知られる。1900-34年、第二高等学校教諭。遠藤は在学中に晩翠の影響を受けた
2——星島二郎[1887-1980]弁護士・政治家。倉敷市に生まれる。東京帝国大学法科大学法律学科卒業。片山哲と中央法律相談所を東京日比谷に開設。同相談所は遠藤の設計による。また、星島は犬養毅の秘書となり政治家への道を進んだ。その後、衆議院議員となり、戦後は法務大臣、衆議院議長を務めた。なお、ご子息の光平氏はライトに学んだ建築家
3——犬養毅(木堂)[1855-1932]政治家。岡山市出身。立憲政友会総裁、第29代内閣総理大臣。1932年5月15日、総理公邸で青年将校らによって暗殺された(五一五事件)。犬養毅の設計は星島を通じて遠藤に依頼された
4——山邑太左衛門(8代目)[1873-1944]山邑酒造(現・櫻正宗)社長。娘・雛は星島二郎の夫人。別邸の設計は、山邑→星島→遠藤→ライトへと依頼されたと推測される
5——星島が中心となり企画された複合ビル。1923年秋に着工の予定であったが、関東大震災により区画整理が行われたため建設中止となった。山邑太左衛門別邸と同様、ライトのスケッチに基づき遠藤現建築創作所が実施設計した
6——吉野作造[1878-1933]政治学者・思想家。宮城県大崎市に生まれる。大正デモクラシーの代表的論客。民本主義の思想家として知られる。東京帝国大学法科大学政治学科卒業。大学院を経て、講師、助教授、教授となるが、辞任し再び講師となった。娘・信子は土浦亀城夫人
7——関東大震災後、本所にバラック(いわゆるツーバイフォー)方式の賛育会産院などが建てられた。1930年にはRC造4階建ての賛育会病院が完成した。関連の大井病院なども遠藤の設計
8——伊藤清造「詩と哲学と建築と(遠藤工学士を論ず)」『建築世界』1920.8



満州中央銀行倶楽部

上から——全景/バーゴラと池/社交室:緩やかな南下がりの敷地に従い、建物中央部に北から図書室・社交室・ベランダ(兼廊下)が階段状に配置され、テラス、池、バーゴラへと続く。遠藤は設計どおりの人の動きを見て「みんな俺の魔法にかかった」と得意げだったという
[出典:「建築知識」1936.6]

- 9——山本拙郎「住宅建築と宿命」『東京朝日新聞』1925.1.17)に対して、遠藤新「建築啓蒙」『東京朝日新聞』1925.1.20-22)で住宅設計について反論した
山本拙郎(1890-1944)高知県出身。早稲田大学建築学科卒業後、住宅設計・施工専門会社「あめりか屋」に入社。雑誌「住宅」主筆を務めた
10——山本拙郎「二人の建築家とその作品」『建築評論』1920.7
後藤慶二と遠藤新について述べたもの
11——遠藤新「日記」『建築家遠藤新作品集』遠藤新生涯百年記念事業委員会編【中央公論美術出版/2001】
12——墨田区本所に内務省給与の材料で建設された
13——東洋軒、陶陶亭、盛京亭、銀座ホテルなど

- 14——『賛育会物語』藤田逸男著【私家版/1953】
15——遠藤新「空に張るデプロマ—議院建築と建築家の領域」『建築知識』1937.3
16——林愛作[1873-1951]群馬県に生まれる。米国のマウントハーモン学校卒業後、山中商会ニューヨーク支店副支店長となりライトと知り合う。後に帝国ホテル常務取締役支配人となった林は、ライトに帝国ホテルの設計を依頼したが、完成を待たずに支配人の座を去った。1930年には林の理想とするホテル・甲子園ホテルが完成したものの、ホテルとしては短命であった。その後、南満鉄業取締役などを務めた
17——遠藤新「甲子園ホテルについて」『婦人之友』1930.6
18——遠藤は、瀋陽(旧奉天)滞在時は奉天ビルホテルを定宿とし、1階の宴会場の改装も手がけた
19——日満育英会如蘭塾(国登録有形文化財)は、奉天ビルホテルの経営者・野中忠太の依頼により遠藤が設計した
20——久保貞次郎[1909-96]足利市に生まれる。1938-39年、児童美術研究のためアメリカ、およびヨーロッパに遊学。創造美術教会設立、跡見学園短大で教鞭を執るなどし、町田市立版画美術館館長となる。久保貞次郎邸、久保貞次郎邸ギャラリーは遠藤の設計
21——久保貞次郎「遠藤先生の思い出」『建築』1963.7

る姿勢を書き留めている^[14]。

昭和期——日本と中国東北部での遠藤

遠藤は言う。「空間の機微に精達して、それと人間心理の機微とが相応する所に初めて設計がある」と^[15]。例えば、横浜女子商業学校のある教員は、初めて学校に行った時に、よくあるような案内や矢印がなかったが、迷わずに道路から自然に校舎へ、そして教室などの部屋へ導かれるように入っていくことができ驚いたという。

また、甲子園ホテルは、西洋のホテルの設備と日本の宿屋のサービスを合体させたもので、帝国ホテルの支配人であった林愛作^[16]の考えた理想のホテルとしてつくられた。ホテルは戦時の影響で用途を変え、戦後は進駐軍が使用した後、大蔵省の管理となったが、昭和40年[1965]2月に武庫川学院に払い下げが決まり、武庫川女子大学甲子園会館として現在に至っている。レセプションルーム(居間)、グリル(食堂)、図書室(書斎)、そして客室(寝室)と、住宅のように設計され、「一般の住宅よりも廊下の短いホテル、日本人の風俗慣習に適合して家庭的な趣きの、婦人にも子供にも都合のよいホテルが出来上った^[17]。客室塔は“三葉形”で、東西に配されて、“パブリックスペース”でつないでいる。水が低きに流れる如く、各室からの流れ、小さな溜まり、大きな溜まりが相まって居心地の良い部分と全体が一体となっていることが分かる。バンケットホール、およびグリルからはテラスを介してさらに低い庭、そして池へとつながり、遠藤が仕掛けた客を誘う“魔法”がそこかしこに見られるのは、彼の言説どおりである。

また、新京(長春)の帝国ホテルとも呼ばれた華やかな社交の場・満州中央銀行倶楽部も設計しているが、今は見る事ができない。

人間くさいエピソードも多い。かつて林愛作の三女・保子氏は、遠藤の印象を「よく恐い方とか言われていますが、私にはとても優しい方でした」、そして彼の風貌から「女学校に上がるまで、本当に鐘馗さまだと信じていました」と話された。また、旧満州(中国東北部)では、遠藤がよく訪れて囲碁や話を楽しんだ友人宅で、女学校のお嬢さんがカップに入れた紅茶を出した時「お嬢ちゃん、座布団を忘れたね」とソーサーを座布団と言って笑わせたという。そして冬のある日、遠藤が定宿にしていたホテル^[18]から使いが来た。使いは、遠藤が毛皮のコートを間違えて着て帰ったのではないかと訪ねて来たのだった。遠藤は「一番良さそうなのを借りてきた」と平然と答えたという。夏には禪^{ふんどし}だけであることもよくあったという。ホテル客室で、素っ裸でいるところに入ってきたルームサービスの女性は、目のやり場に困ったという。豪放磊落の一語に尽きる話である。話は変わって旧満州から佐賀県武雄の日満育英会如蘭塾^[19]の現場へ同僚と向かった時のこと。風貌からか、スパイではないかと怪しんだ特別高等警察は、武雄まで彼らを尾行してきた。旅館で有名な建築家であることが分かり、すごすごと引き上げていったという。

そして終戦間際、軍関係者に飛行機での脱出を勧められた遠藤だったが、自分だけ逃げるわけにはいかないと自ら残留したという。そして、終戦後1年3ヵ月が過ぎた昭和21年[1946]11月に、病気を抱えた遠藤は帰国した。

住宅にまつわる話あれこれ

敷地を見に来た遠藤は塀のそばで、まず立小便をした。施主の久保貞次郎^[20]は記す。「この立小便の意味はそのときはぼくにはよく理解できなかったが、あとでもう一度同じ経験を重ねたとき、ぼくはいくらかこの建築家の心情に共感をいただくことができた^[21]と。遠藤はマーキングしたのだった。施工については、タイル目地のやり直し、板壁の張り直しなど、壊してやり直させたという話を筆者は幾人かの関係者から聞いている。久保貞次郎邸の現場に遠藤は「一度やってきて、2,3の個所のやりなおしを命じた。その命令はしかしおだやかであった^[21]という。

また、平面逆転の話もある。葉山にある加地利夫別邸は、海に近い側がスキップフロアの5層で、遠い側が2層であるが、施主のご子息である信氏によれば、設計はこの逆の配置であったという。現場での判断で、平面図が反転され、現在のように建てられたという。海からは幾分距離はあるものの、展望室から海を眺めやすくなったのだという。確かに変更のおかげか海が望めるようになっている。この建物は建築に興味を持つ施主夫人の希望を取り入れた結果、当初の予算の2倍近い建設費になったという。

一方、声楽家の矢田部勤吉邸^[22]は、夫妻でのドイツ遊学後に国立の学校に通うに都合の良い武蔵野市に建てられた小住宅で、吹抜けの音楽室兼居間はピアノのために床板は2重張りされている。しかし、若い声楽家の要望で全体はローコストで出来るように考えられた。正子夫人にドイツ留学のことなどを伺ったことがある。「主人はこの家がたいそう気に入っていたようで、よく『この家にいるのが一番いい』と言っていました。ドイツから帰ってからは、一度も旅行に連れて行ってくれなかったのですよ」と楽しそうに夫人は話された。建築家冥利に尽きる話である。

命を削った戦後の奮闘

川喜田煉七郎^[23]は「歴史にのせた人間 遠藤新^[24]」で、「ライトのマツシブでスマートな線に対して、彼のほどこまでもマツシブだけであつた。デザインも姿でもある。長髪に皮のきものに長靴、そしてくまのようなひげである。この顔にはおりはかまをつけて、アメリカを歩いてきたのである」と、遠藤について述べている。そして、満州でも「既成の原案を一晩で変更して全く新らしプランを展開してみせ、黒白をつける……という風である(新京に建てた中央銀行クラブは当時の傑作である。)そして常に《世間の通念に抗議して》この実践のあくことないつみかさね》につかれ、たおれて後止んだのが彼なのではあるまいか」と建築と社会に対する遠藤の憤りを解説し、戦後の新制中学校の校舎建築について「彼らしいやり方で既製の標準型を一々ぶちこわし、個性のある改良案を比較してならべ、《建築家の領分》からげきれつに抗議している」。その様子は「十年前の彼と少しも変っていない」と、遠藤の変わらぬ行動ぶりを記している。

「遠藤先生の思い出」——ライトと遠藤

久保貞次郎がタリアセンにライトを訪ねた時のことである。久保は、ライトが「アジアの弟子エンドウサンを、この上なく愛していることを知って胸をつかれた。かつてライトの弟子であった土浦亀城氏やレイモンド氏の名もライトの口から出たが、エンドウサンとはずっと区別して語られ、エンドウサンの名はまるでライトのむすこのような響きをもっていた^[21]とライトの遠藤への親愛を伝えている。また、昭和13年[1938]に久保がアメリカ、ヨーロッパに出掛ける前の送別パーティーのオークションで、遠藤は下を向いて色紙に筆を走らせながら値をつり上げて2本のネクタイを競り落とした。「ぼくたちはネクタイしない遠藤先生が、ネクタイだけをおとした気持をはたして、当時どのくらい理解しただろうか^[21]と久保は記している。遠藤はネクタイにライトの姿を見ていたのではないだろうか。

遠藤新は、生涯を通じて“全一”という考え方を建築に込めて伝播しようとした建築家であり、自然環境および社会環境における建築のとるべき姿を求め続けた建築の“行者”であった。遠藤の作品や著述は、これからの建築を考える上での、照応する歴史のひとつであると考えている。

いのうえ・ゆういち——文化女子大学短期大学部教授/1951年生まれ。神奈川大学工学部建築学科卒業。工学院大学大学院工学研究科博士後期課程建築学専攻修了。博士(工学)。近藤賢二別邸、加地利夫別邸、矢田部勤吉邸、石原謙邸、小宮一郎邸、白井喬二郎ほか、多数の実測・調査を行い、雑誌「住宅建築」複数号に掲載。「NPO法人 有機的建築アーカイブ」の運営に参加。現在、副代表理事。



矢田部勤吉邸

上——外観:ドイツ留学後に建てられたこの住宅の施主であった矢田部は、遠藤に“ドイツ風”にとの依頼をしたという。なお、斜め材は後に矢田部自身が取り付けたもの
下——音楽室兼居間:暖炉の左上には室内バルコニーがあり、音響効果を考慮した凹凸のある平面、および断面形状の室内となっている。声楽家であるご子息の耕吉氏によれば、ここで歌うと上手になった気がするそうである
[写真:井上祐一]



遠藤新建築創作所スタッフの集合写真 | 後列左から1人
おいて柴田太郎、川喜田煉七郎、山村伍一郎、遠藤。前列左から1人おいて八木橋西造、阿部春勝、大河原才吉、1人おいて岡見勉彦[所蔵:井上祐一]

- 22——矢田部勤吉[1896-1980]東京音楽学校(現・東京藝術大学)卒業後、ドイツ・ベルリンへ留学。帰国後はオペラ歌手として舞台上立つが、主な活動は音楽教育や声楽曲の翻訳、学内オーケストラの指揮など
23——川喜田煉七郎[1902-75]1932年、「日本のパウハウス」と呼ばれた新建築工芸学院を設立
24——川喜田煉七郎「歴史にのせた人間 遠藤新」『新建築』1951.9



甲子園ホテル

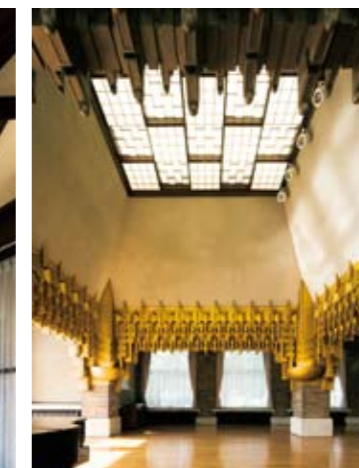
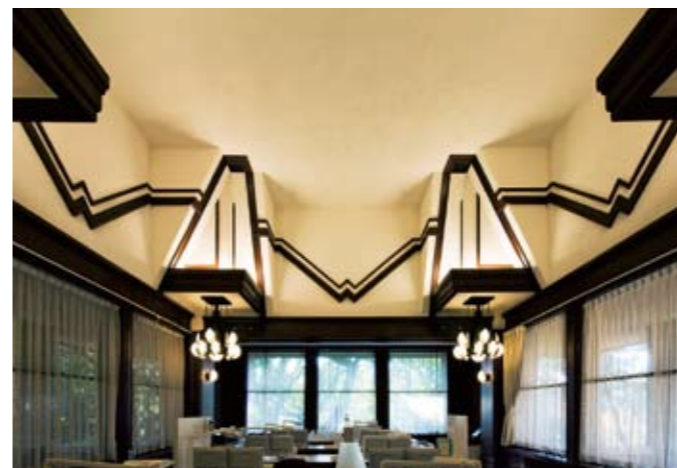
(現・武庫川女子大学甲子園会館)

竣工年:1930年

所在地:兵庫県西宮市戸崎町1-13 | 規模:地下1階、地上4階
構造:RC造 | 国登録有形文化財



2



3

4

5



6

1—南面外観:この建物の正面ともいえる南面は、グリルとパンケットホールを両脇に、東西の塔、レリーフ、そして彫刻を施した列柱により印象づけられる。遠藤の仕掛けが、室内からテラス、庭園、池へとリゾート客を誘(いざな)う

2—1階廊下:東西の客室などを結び、玄関ホール脇の2ヵ所のホールが溜まりとなっている。彫刻の施された力強い柱と一体になった照明は、独特の雰囲気を出す

3—グリル:貝殻状のガラスのシェードは、グリルでは大小のシャンデリアとなり、トリムと共に室内にリズムを与えている。略仕様書(『新建築』1930.7)によれば天井は銀粉仕上げであった

4—パンケットホール:ホテル全体に使用された打ち出の小槌を基調とするデザインの集約ともいえる華やかな石膏彫刻の装飾(オーナメント)。略仕様書によれば壁天井(障子部分を除く)は金粉仕上げとなっている

5—レセプションルームの暖炉:悠然たる石彫の懐に薪の燃える音が聞こえ、匂いと炎が立ち上る時、居心地の良い本来の空間が出現する

6—棟飾りと屋根:甲子園ホテルの象徴である打ち出の小槌が棟飾りとなり、頂点に据えられている。また、遠藤が通常、瓦葺きでは高くない下り棟を、ここでは輝きと陰影を強調して松籟(しょうらい)と呼びさせている

[室名、解説の内容は建設時に準じています]



小宮一郎邸

竣工年:1937年

所在地:東京都西東京市 | 規模:地上1階
構造:木造



2



3



4



5

1—居間の暖炉:遠藤は、かつて蔵が建ち並んでいた施主の出身地のイメージにつながる、蔵のような暖炉の部屋を提案した。勾配天井と梁がそれを物語る。暖炉は、国文学者の施主が読書に耽るための場所として設えられた。遠藤が1930年代によく使用した鉄粉入りのボーダータイルが張られた暖炉は、戸棚と飾り棚を一体としてつくられている。煙道周りの漆喰壁のひび割れは、戦時中の爆弾の衝撃によるもので、この家に刻まれた歴史のひとつである

2—居間:海と海に注ぐ川のように、居間と各室との関係をつくることで、家族が自然に居間に溜まる家にしよう、というのが遠藤の考えであった。また、居間は明暗の階調と垂れ壁により、くつろぎ、暖炉前の落ち着き、食堂へのつながりといった心理的な領域が極めて自然に創出されている

3—アプローチ:小宮邸に近付くと、大谷石の門柱が垣に入ると、門から続く踏み石の先に円形窓の穿たれた玄関ポーチが見える。遠藤が「空間の機微」と「人間心理の機微」が相応するところに設計がある」というように、家が経路を示し、訪問者を玄関へと導く

4—テラスと庭:アーチのあるテラスは、居間と庭を結ぶ。居間からテラス、テラスから庭へ…、遠藤が得意にしていた人を誘(いざな)う建築の術の具現である。左奥に見える庭と広縁と和室の関係も同様である

5—暖炉脇の戸棚:お気に入りの戸棚を新居に使いたいとの施主の願いを、遠藤は設計に組み込んだ。戸棚は遠藤の設計ではないものの、違和感なく納められている。生活を規範とし、住み手を大切にしている遠藤の設計を示す一例である

目白ヶ丘教会

竣工年:1950年

所在地:東京都新宿区下落合2-15-11
規模:地上2階 | 構造:RC造



2



3



1—祭壇方向を見る:この教会は、外観、構造(内在骨格)、室内空間、および建設費などを一体として考えられた、遠藤が「三枚おろし」と呼ぶ方法で設計された。内在骨格である2つの大きなアーチ状の梁・壁(柱)・屋根が「総持ち」(一体構造)となっている。当初の設計では棟の部分は剛接合ではなく、スリットとなっていた

2—北東側外観:遠藤は教会の姿を「仁王様が金棒を持って立っている姿」と語り、塔の水煙のような飾りの下にある鐘はスピーカーで音を出す計画であった。塔の曲線は、現場で遠藤が合板に原寸で描いたものである

3—大アーチと西側窓:遠藤が「三枚おろし」の説明で「平土間」(中央部)、「脇棧敷」(両側側)と呼ぶ2つの梁がもたらす室内は、天井まで穿たれた窓からの光により、荘厳にも明るく穏やかな礼拝の場となっている

自由学園

遠藤は、洗礼を受けた富士見教会で羽仁吉一もと子夫妻と知り合っていた。自由学園の設計は、羽仁夫妻から遠藤に依頼されたが、遠藤は、帝国ホテル建設のために東京に滞在中のライトを羽仁夫妻に紹介した。そして自由学園校舎(現・明日館/国重要文化財)は、ライトが設計することになった。設計図には、「FRANK LLOYD WRIGHT ARCHT.」,「ARATA ENDO ASSOCIATE ARCHT.」と2人の名前が書かれている。その後の講堂を始め、東久留米に建設された自由学園のキャンパスと校舎群は、遠藤の設計によるものである。



自由学園校舎(現・明日館)

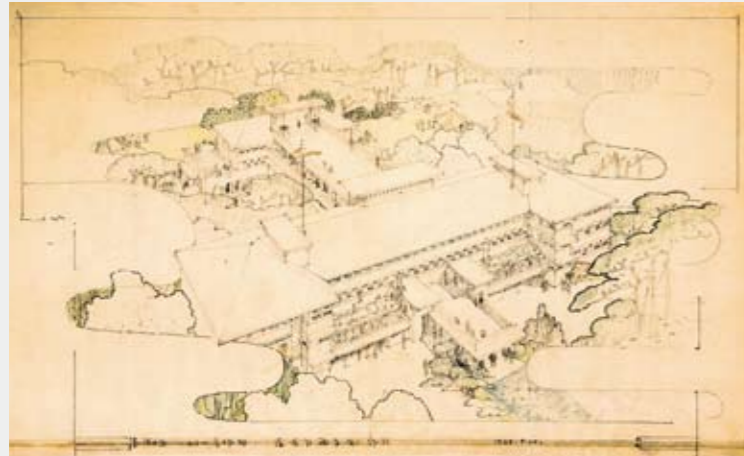


1

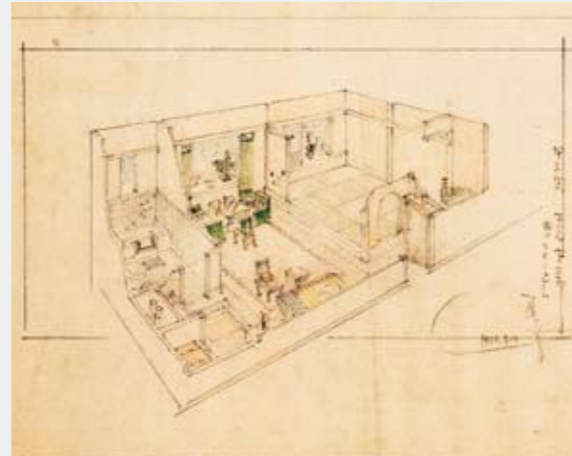


2

甲子園ホテル



3



4

児島喜久雄邸計画案



5

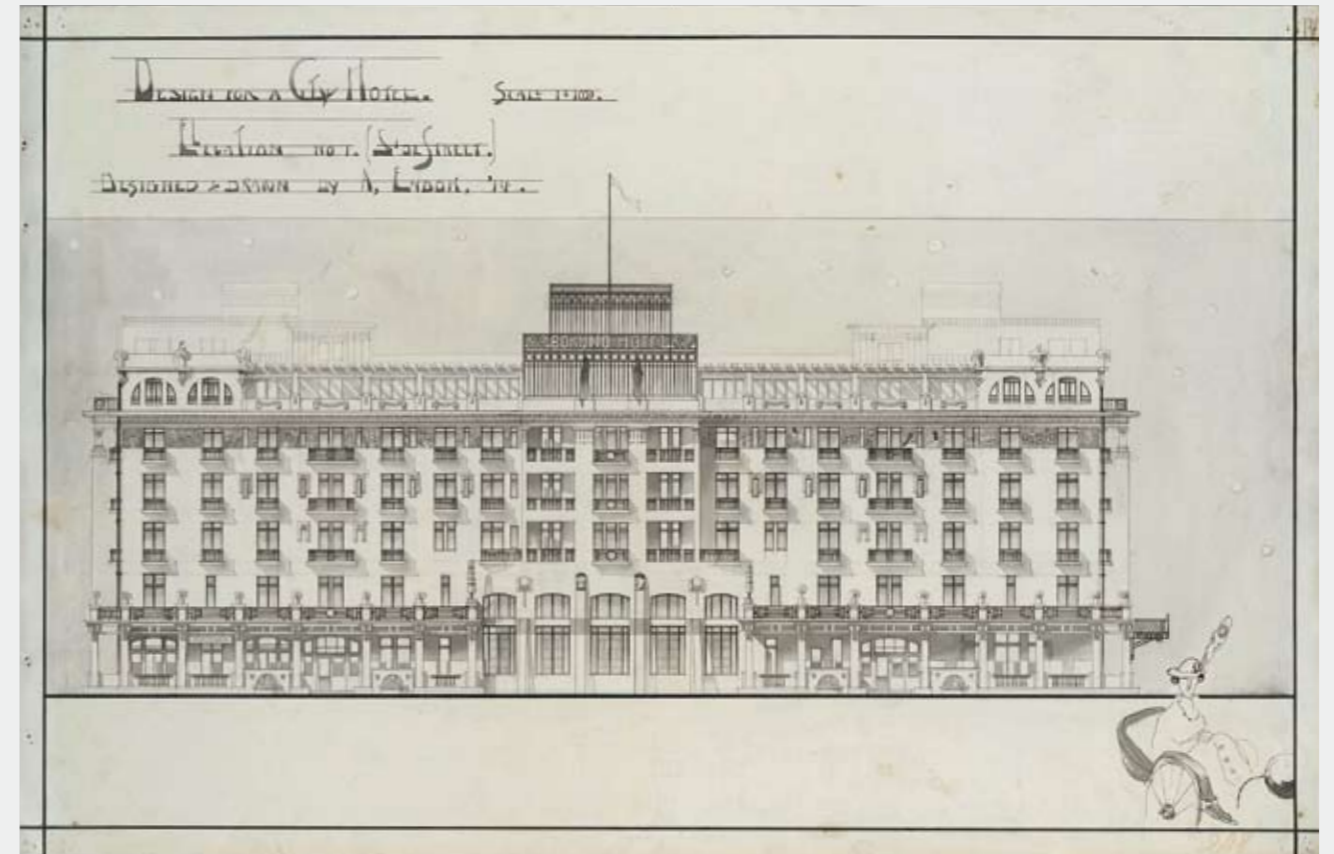


6



7

- 1—自由学園講堂透視図:鉛筆と色鉛筆で描かれた図からは、子女の歌う声が聞こえてきそうである[1927] | 2—(南沢)自由学園女子部鳥瞰図:特徴ある半円形の体操館と大芝生が生徒を迎える[1934]
 3—甲子園ホテル鳥瞰図:この計画案は実施案とは全体の姿が異なり、三葉形の客室棟や塔は見られない[1928] | 4—同客室透視図:和室と洋室のコンビネーション。水まわりの位置は実施案と異なる[1928]
 5—児島喜久雄邸計画案立面図(1932年3月31日):大正期に見られる特徴の2階が小さい案 | 6—同(4月21日):「私はこちらの方が好きです」と遠藤のメッセージが書かれている |
 7—同(5月27日):1930年代に多い特徴である総2階に平屋を接続した平面計画と考えられる。計画の変容に進展の跡が伺える[1932]【所蔵:遠藤現建築創作所】



8



9

- 8—卒業設計「CITY HOTEL」立面図:旗竿の下には「BOKUNO HOTEL」とある。人力車の女性とともに、遠藤のお茶目なところをのぞかせている | 9—同断面図[1914]【所蔵:東京大学工学部建築学科】

- 明治22年[1889]
 - 6月1日、福島県相馬郡福田村で生まれる
- 明治44年[1911]
 - 相馬中学校を経て、第二高等学校卒業。東京帝国大学工科大学建築学科入学。東京富士見教会で洗礼を受ける。帝国ホテルの林愛作支配人と知り合う
- 大正3年[1914]
 - 9月、東京帝国大学工科大学建築学科卒業。卒業設計「CITY HOTEL」
- 大正4年[1915]
 - 明治神宮造営局勤務。明治神宮宝物殿競技設計に参加。3等2席入選
 - 東京停車場と感想1-5「読売新聞」1.27-31
- 大正6年[1917]
 - 1月8日、初めてフランク・ロイド・ライトに会う。4月20日、ライトと共に渡米し、帝国ホテルの設計に従事
- 大正7年[1918]
 - ライト、山邑太左衛門別邸を設計。シカゴにリス・H. サリンを訪ね、暮れに帰国
 - 米国トート風吉近信「建築雑誌」9
- 大正8年[1919]
 - 帝国ホテル着工。チーフアシスタントとして帝国ホテルの建設に従事
- 大正9年[1920]
 - 江原都と結婚
 - 立体的建築「建築評論」4
- 大正10年[1921]
 - 建築は立体として取扱わねばならぬ—アパートメントハウスの設計に当って「家庭週報」617号
- 大正11年[1922]
 - ライト帰国。遠藤南建築創作所設立
 - ライト氏に就いて「新帝國ホテルと建築家の使

- 命(訳)「科学知識」4 | 自由学園の建築(ライトと連名)「婦人」6
- 大正12年[1923]
 - 卓と椅子に因む「婦人」6 | 海岸の小別荘「婦人」7 | 地震と建築「婦人」10 | パラック、パラック、パラック「婦人」11
- 大正13年[1924]
 - 帝國ホテルの構造について「科学知識」1 | 筋かいボルト不適当「婦人」1 | 建築を坑にせよ「時事新報」1.14 | パラックに応用する新建築体系1-5「時事新報」1.15-19 | 東洋軒日比谷食堂「建築の日本」5 | 住宅小品十五種「婦人」5 | 創作の一元「建築の日本」6 | 悦びでない悦び「婦人」6
- 大正14年[1925]
 - 日比谷で建築展覧会を開催
 - 住宅小品二題「婦人」1 | 建築啓蒙1-3「東京朝日新聞」1.20-22 | 台所の作り方「婦人」3 | 発生的に考える—建築の社会性「婦人」8
- 大正15年[1926]
 - 八畳床押し入れつき「婦人」1 | 子供室は六ヶ敷い「婦人」3 | 玄関、門、垣根「婦人」4 | 電車降りると直ぐ角店、御傘履物舗よろしきか「婦人」6 | 住宅改造案に答えて「婦人」7 | ライトの序論訳「ライト作品集」9 | 建築美術「アルス大美術講座」下巻 | 建築論「アルス建築大講座」第7巻
- 昭和2年[1927]
 - ある日の日記「婦人」2 | 三、四千円で出来る小住宅設計「婦人」4 | 自由学園講堂「婦人」8 | 石原さんの家「婦人」9
- 昭和3年[1928]
 - 有川君の家「婦人」4
- 昭和5年[1930]
 - 南沢の冬「婦人」2 | 甲子園ホテルについて「婦

- 人」6 | 審査につらなつて—グループ住宅懸賞当選者発表「婦人」11
- 昭和6年[1931]
 - 南沢の学園小学校「婦人」8
- 昭和8年[1933]
 - 中国東北部(旧満州)へ渡る。以後、旧満州と日本を行き来する。旧満州では新京(中国長春)を中心に設計活動をする
 - 新しい婦人之友社「婦人」1
- 昭和9年[1934]
 - テーブル・椅子「婦人」9
- 昭和10年[1935]
 - 南沢に自由学園新築成る「婦人」1 | 座談会:新日本建築を語る「知識」4 | 座談会:ものさしを語る「婦人」4 | 座談会:満州の新建築を語る会「知識」5 | 南沢の門「婦人」6 | 熱河、北京を建築的に観る「婦人」9
- 昭和11年[1936]
 - 新京中銀俱樂部について「知識」6 | ホテルの増築「新建築」7 | 帝國ホテルの増築に就いて「知識」8 | 男子部体育館について「婦人」10
- 昭和12年[1937]
 - 空に張るデプロマ—議院建築と建築家の領域「知識」3 | 日本的なるもの・何んにも無い「婦人」9
- 昭和14年[1939]
 - 新春建築雑感「婦人」2
- 昭和15年[1940]
 - 煉瓦に聴く「婦人」5 | 北京の性格「婦人」8
- 昭和16年[1941]
 - 日本的なるもの・茶ブダイ「婦人」9
- 昭和17年[1942]
 - 座談会:大東亜共栄圏に於ける建築様式「建築雑誌」9 | 中銀俱樂部の構想—煉瓦に聴く「満州建築雑誌」10

- 昭和18年[1943]
 - 南満州鉄道・満州興業金庫・満州重工業・昭和製鋼所顧問となる
- 昭和19年[1944]
 - 狐と鼠「鉄魂」9
- 昭和20年[1945]
 - 旧満州で敗戦を迎える
- 昭和21年[1946]
 - 5月、発病。心臓発作で新京で入院。11月、帰国。東大病院へ入院
- 昭和22年[1947]
 - ライトより舞金を送られる。秋に退院
- 昭和23年[1948]
 - 進駐軍CIE(民間情報教育局)に日本の六・三・三制教育の学校建築理念を建言し支持される。仙台公会堂設計競技審査員。農村文化施設の研究(役場、協同組合、託児所、診療所、公民館)
 - グループ住宅について—笹川さん御夫妻へ「婦人」1 | 村の家の研究を手伝って「婦人」6 | ライト自叙伝を読む1-3「婦人」9-11
- 昭和24年[1949]
 - 文部省学校建築企画協議会委員になる
 - 一建築家のする—日本インテリアへの反省「国民」3 | 東京駅と校舎「朝日新聞」3.27 | 哲学なき教育と校舎—日本インテリアへの反省(その2)「国民」5 | 国民に訴える—新制中学校の建築について「新児童文化」11 | 積木を考ふる積木とあそぶ「婦人」12
- 昭和25年[1950]
 - 4月、東大病院へ入院。暮れに退院
- 昭和26年[1951]
 - 4月、東大病院へ入院。6月28日、逝去(62歳)

主な作品 | Works | ●印は現存 | ※印は所在地不明

- 大正4年[1915]
 - 中央法律相談所改装(東京)
- 大正9年[1920]
 - 吉野作造増築(書齋・遊戯室)(東京)
- 大正10年[1921]
 - 櫻楓会アパートメントハウス(東京)
- 大正11年[1922]
 - 犬養木堂邸(東京) | 自由学園校舎(ライトと共作、東京/国重要文化財)● | 日比谷三角ビルディング計画案(基本スケッチ:ライト、実施設計:遠藤南建築創作所、東京)
- 大正12年[1923]
 - 大久保邸(東京) | 劍持邸(東京) | 川島理一郎邸(神奈川県) | 有川治助邸(神奈川県) | 杉島邸(東京) | 二軒立の家計画案(東京) | 日比谷世帯の会館(東京) | 早稲田相互住宅(東京) | 東洋軒(東京) | 陶陶亭(東京) | 盛京亭(東京) | 銀座ホテル(東京) | 西村貿易店(東京) | 第一屋(東京) | 第一屋分店と山邑酒造店(東京) | 賛育会産院(東京)
- 大正13年[1924]
 - 星島氏子供の家と上代邸(岡山) | 遠藤新自邸(東京) | 新井睦男邸(東京) | 筒井邸(東京) | 安成邸(東京) | 田原邸(東京) | 相原邸(神奈川県) | 大沢邸(東京) | 稲田邸(東京) | 茅野齋々邸(神奈川県) | 萩原庫吉邸(東京/国登録有形文化財)● | 山邑太左衛門別邸(基本設計:ライト、実施設計:遠藤新・南信、兵庫/国重要文化財)● | 慶雲楼(東京)
- 大正14年[1925]
 - 東京帝国大学基督教青年会館(東京) | 羽仁吉一郎邸(東京) | 山田秀雄邸(東京) | 近藤賢二別邸(神奈川県/国登録有形文化財、移築)● | 野村浅吉邸(東京) | 新井哲郎邸(東京) | 山陽高等女学校校舎増築(岡山)
- 大正15年[1926]
 - 石本邸(東京) | 石橋邸増築(千葉) | 阿久津病

- 院(東京)
- 昭和2年[1927]
 - 自由学園講堂(東京/国重要文化財)● | 石原謙邸(宮城)● | 黒崎貞彦邸(東京) | 高橋泰邸(東京) | 横濱基督教青年会館増築(神奈川県) | 三澤邸(東京) | 西川邸(東京) | 出口松尾邸(東京)
- 昭和3年[1928]
 - 梁瀬自動車本社ビル(東京) | 加地利夫別邸(神奈川県)● | 森久保寿邸(東京) | 矢田部勤吉邸(東京)● | 高瀬荘太郎邸(東京)● | 石川家納骨堂(栃木)● | 日本キリスト教会鶴見教会(神奈川県) | 天城幼稚園(岡山) | 佐藤病院(宮城)
- 昭和4年[1929]
 - 番町教会(東京) | 宮下ビル(神奈川県) | 神榮商会ビル(神奈川県) | 自由学園初等部校舎(東京/東京都選定歴史的建造物)● | 羽仁吉一郎邸(東京) | 小松邸(東京) | 浮田和民邸(神奈川県) | 渡辺吉次邸(東京)
- 昭和5年[1930]
 - 洪田見邸(東京) | 自由学園清風寮(東京) | 甲子園ホテル(兵庫/国登録有形文化財)● | 賛育会病院(東京)● | 渡辺扶邸(東京)●
- 昭和6年[1931]
 - 加地利夫邸(東京) | 石原謙別邸(栃木)● | 遠藤新自邸(東京) | 山本節次郎邸(東京)● | 小塩次次邸(東京、移築)● | 小林漆邸(東京) | 加藤邸(大阪) | 千葉貞子邸(東京) | 自由学園初等部校舎増築(東京)
- 昭和7年[1932]
 - 笹屋ホテル西館・中広間(長野) | 久山邸(東京) | 田中富士雄邸(東京)● | 児島喜久雄邸計画案(宮城) | 婦人之友社社屋(東京) | 小町屋操三郎邸(宮城) | 恩地孝四郎邸(東京)● | 松川屋増築(栃木) | 白井喬二邸(東京)
- 昭和8年[1933]
 - 新京国際ホテル計画案(中国) | 京城の家(韓国)
- 昭和9年[1934]
 - 自由学園女子部校舎・食堂・講堂・化学室(東京/東京都選定歴史的建造物(校舎・食堂・講堂)●) | 賛育会病院別館(東京) | 百瀬院邸(東京) | 横浜女子商業学校(神奈川県) | 兵藤邸(東京) | 吉屋信子別邸(長野) | 満州中央銀行総裁邸・副総裁邸・理事邸・社宅(課長宿舍・副課長宿舍・集合住宅)(中国) | 江川邸(大阪)
- 昭和10年[1935]
 - 満州中央銀行倶楽部(中国) | 大阪友之会友之家(大阪) | 自由学園男子部校舎(東京)一部● | 羽仁五郎邸(東京) | 久保貞次郎邸(東京) | 川久保修吉(神奈川県) | 品川邸増築(東京) | 常盤学園増築(宮城)
- 昭和11年[1936]
 - 自由学園男子部体育館(東京/東京都選定歴史的建造物)● | 大井病院(東京) | 池口邸(東京) | 家庭購買組合(東京) | 野木邸(東京)
- 昭和12年[1937]
 - 小宮一郎邸(東京)● | 賛育会病院新館(東京) | 兒島善三郎邸(東京) | 日本エヤーブレーキ神戸工場(兵庫)
- 昭和13年[1938]
 - 田河水泡邸(東京) | 真岡尋常高等小学校講堂(栃木/国登録有形文化財、移築)● | 自由学園東天寮(東京) | 松井貞邸(東京)
- 昭和14年[1939]
 - 吉屋信子別邸増築(神奈川県) | 自由学園女子部第二寮(東京)
- 昭和15年[1940]
 - 杏花寮(中国) | 賛育会病院寄宿舎(東京)
- 昭和16年[1941]
 - 京見会館(兵庫/姫路市都市景観重要建築物)● | 佐藤哲三アトリエ計画案(新潟)
- 昭和17年[1942]
 - 久保貞次郎ギャラリー(栃木) | 奉天鉄西倶楽部計画案(中国)
- 昭和18年[1943]
 - 日清育英会如蘭塾(佐賀/国登録有形文化財)● | 東北帝国大学講堂増改築(宮城) | 自由学園初等部体操館(東京) | 奉天ビルホテル宴会場改装(中国) | 奉天警察庁講堂改造(中国)
- 昭和20年[1945]
 - 北陵ホテル(中国) | 興農金庫吉林支行(中国) | 興農金庫齊齊哈爾支行(中国)
- 昭和21年[1946]
 - 木村邸増築(千葉)
- 昭和23年[1948]
 - 内田邸(東京) | 横井邸(東京) | 本多里平邸(東京)
- 昭和24年[1949]
 - 自由学園最高学部計画案(東京) | 品川油化研究所工場(東京) | 斉藤良雄邸(東京)
- 昭和25年[1950]
 - 飯能繊維工業事務所(埼玉)● | 目白ヶ丘教会(東京)● | 左内坂教会(東京) | 教育図書社屋(東京) | 十文字中学校(秋田) | 小原鎌倉ホテル増改築(宮城)● | 阿部邸(東京) | 秋田児童会館(秋田) | 岩谷東光中学校(秋田) | 長岡中学校(新潟)
- 昭和26年[1951]
 - 若柳中学校(宮城) | 那須高原ホテル松川屋設計(栃木) | 飯能繊維工業食堂(埼玉)●
- 昭和27年[1952]
 - 田尻中学校(宮城) | 一迫中学校(宮城)
- 年代特定不可
 - 福興邸● | 津島邸● | 近藤邸● | 河崎子爵邸(東京) | 片山哲邸(神奈川県) | 阿久津邸(東京) | 江川邸(東京) | 岡田哲蔵邸(東京) | 木部修二邸(千葉) | 正則中学校増築(東京) | YMCA 東山荘(静岡) | 京橋旅館(東京) | 里見邸(神奈川県) | 村津邸● | 海岸の小別荘(千葉) | 柳沢邸(東京) | 内池邸● | 山内二郎邸(離れ家)(東京)● | 井上匡四郎子爵別邸(神奈川県) | 井上氏貸家・アパート(東京) | 酒井祐之助邸● | 今泉邸(東京)

取材協力:遠藤現建築創作所/自由学園明日館/東京大学工学部建築学科/日本バプテストキリスト教日白ヶ丘教会/町田さとみ/南哲也/武庫川女子大学甲子園会館/矢田部耕吉 | 参考資料:「建築家遠藤新作品集」遠藤新生誕百年記念事業委員会編[中央公論美術出版/2001] | その他:特記のない写真は撮影下ろしです | 次号予告:「INAX REPORT No.182」の「続・生き続ける建築」は安井武雄です